

査証

1972,12<NO,6>

★デイル・ヤシン作戦の総括と自己批判

VZ-58 来見 弘

☆意見陳述——檜森孝雄

☆日本革命と日本共産党(毛沢東思想)

天地正春

☆浮き袋に穴をあけ溺れる強盗を打ちのめせ!

上野勝輝

★赤軍特別号・全文復刻

文責 森 恒夫

★エリトリア解放戦線革命綱領・英文版全文

テイル・ヤシン作戦勝利万歳！

自己批判・自己批判を経て再生の道へ

意見陳述

テイルアヒウ三戦士ととも

米見 弘 6

檜森孝雄 23

「革命戦争派の危機」とは何か！

レーニン党の復権のために

三菱太郎 25
(共産主義者同盟・R.C)

反米反軍国主義の統一戦線を
うちかためよ！

川島 豪 46

日本革命と日本共産党(毛沢東思想)①

天地正春 52
(日本共産党革命左派
神奈川県委員会)

戦線からの報告②
相模原レポート

友田博美 75

浮き袋に穴をあけ溺れる強盗を打ちのめせ！

上野勝輝 82

相模原闘争の世界革命戦争・
世界共産主義運動に占める位置

救援会報告②
全国的共闘体制と支援体制構築のために

釜ヶ崎救援会 89

資料 赤軍特別号 (71.1.25) 復刻

蜂起——戦争勝利政治集会基調報告

文責 森 恒夫 94

バンドを総括する②

同盟12・18路線の意義と限界Ⅱ
コスモポリタニズムと一国主義
の往還を突破する道とは何か！

共産主義者同盟
(全国委員会)
文責高木一夫 112

DEIR YASSIN, 1948

ZEITA, BEIT NUBA AND YALU, 1967

イスラエルのテロリズム

甦える忘れられた悲劇

ガイ・オットウエル
ミハエル・アダムス
訳井岡 学 126

THE ERITREAN REVOLUTION

エリトリア解放戦線革命綱領

デイル・ヤシンン作戦勝利万歳！

●自己批判、自己批判そして再生の道へ

VZ—58 来見 弘

全世界のプロレタリア人民の皆さん！とりわけアメリカ帝国主義を頭目とする一切の帝国主義・軍国主義・反動派・そして今やプロレタリア階級斗争にはっきりと敵対するに到っている現代修正主義とその同調者に対する激しい戦斗を全ゆる所で、日々くりひろげているプロレタリア人民戦士の皆さん！

私はここで大勝利の中に完遂されたデイル・ヤシンン作戦、にもかかわらずそれを支えてきた我々国内の組織の全く対照的な大敗北に敵への全面屈服を敵しく自己批判し、新たな再生の道を探り、テルアビブ斗争のあの偉大な成を確実にわがものとし、戦列を打ち固め、一歩一歩を前進していくことを表明したいと思う。

総括し、その豊かな意義をわがものとする作業を一切行い得ずに沈黙してきたことは更に犯罪的であり、それ故我々は早急にプロレタリアの責務を果たすことを要請されている。

私はここに以上の階級的裏切り行為によってプロレタリア階級斗争内部に混乱と動揺、不信を持ち込み、ひいてはかの偉大な斗いの意義を陰蔽し、また低め、泥を塗りたくり、正義の斗いとこの自己批判は我々の組織が敵の攻勢の前に全く崩壊してしまっているとは言え、我が組織の名における自己批判でもある。

テルアビブ斗争はまさに偉大な斗争であった故に様々のコメントや批判等が提示されていながら、今一つ主体的に問題の核心に迫っているものがないことは否めない。これは先ず我々こそが他に率先して成すべき当然の責務を果たしていないことにもよっているであろう。テルアビブ斗争から既に四カ月余が過ぎてしまっている。我々の自己批判とその深化の作業はあまりにも遅きに失ったと言わねばならない。にもかかわらず私は今我々のおかれてあるこの現実から出発するより仕方がない。この惨憺たる状況から何が何でも再生するために自己批判の深化の作業をはじめよう。

II

テルアビブ斗争は現代における八国際主義Vをすまじき実践によって具現した。過渡期世界としての現代がまさに世界革命戦争の時代、全世界のありとあらゆる階層、階級を革命戦争の渦の中にたたき込み、全世界的規模でのプロレタリアートとブルジョ

我々プロレタリアートの正義の斗いが進撃を続ける以上、一切の悪の根源に帝国主義に政治公安警察の攻撃、弾圧は熾烈をきわめてくる。そして敵の弾圧が激しくなればなるほど我々プロレタリア戦士はプロレタリア革命、プロレタリア階級斗争の原則を一層堅持し、妥協なき斗いを持続させねばならない。

このたびのテルアビブ斗争においての敵の大攻勢の前に我々が一切の対応をなすこともできずに全面的に屈服していったこと、即ち任意出頭としての供述と、とりわけ中心メンバーの自白はそこにいかなる理由があつたにせよプロレタリア階級斗争の原則からの逸脱・敵対であり、階級的裏切り行為である。だがそれだけではない。あの巨大なテルアビブ斗争を準備し、支えてきた当の我々が、敵への屈服を自己批判し、それを基底としてかの斗いを

アジが斗いを交え、激烈な死闘をくり広げていく時代であり、かかる真に世界を舞台としての斗いにおける国際主義が従来我々を深く抱えていた口先だけの国際主義、一国の窓（しかもその窓は狭く、しばしば曇ったガラスがはめてある）から展望した結果としての一国主義、せいぜい世界からの深遠な？意味付与・解釈に終始した認識運動的国際主義等々とは決定的に異なることを実践的に指し示し、かのエセ国際主義にとらわれていた我々の恥しい姿を白日の下にさらしたのである。「現代に世界革命戦争の世のプロレタリア国際主義とはこうやるんだ！」—我が同志の放った弾丸は我々を呪縛する一国主義の妖雲を打ち払ったわけである。とは言え我々を捕えてきた小ブルのエセ国際主義の呪縛の力はあまりに強く、またあまりにも長く我々はそれに捕われていたので、我々の斗いに対して仰天して言葉を失うもの、おずおずと従来の「国際主義」から解釈を下そうとするもの、「日本での革命はどうするのだ？」等とこっそりささやくもの、またかの呪いにすっかり心を奪われてしまっているものは「あれは日本階級斗争からの逃亡である」と叫び、我々の斗いの周辺で右往左往している。しかしこのような諸君は、目をしっかりと見開いて現実の世界を舞台とした戦闘をじっくりとみつめてみるが良い。最終的にブルジョアジーを絶滅する世界革命戦争の中軸的な斗い世界党建設の斗いが不可避にかかる国際主義を要求し、この課題が世界の到る所に吹き出ている現実を。——

テルアビブ斗争のまさに偉大な第一の意義はその素晴らしい計画性、英雄性、献身性をもって先進資本主義国内プロレタリアート

に巨大な課題をつきつけたことにある。

先進資本主義国―帝国主義国内の革命戦争派の未成熟、低迷、要するにその後進性の故に米帝とソ修社帝という二大反革命の強力な包囲・重圧に耐え切れずやむなく中国共産党がとった米中会談、日中国交回復等の所謂「革命外交」路線は現実に米帝―南ヴェトナムカイライ政権、米帝―シオニズムと激しい闘いをくりひろげている革命武装勢力に対してはやはり大きな打撃を与えた。この意味において我々帝国主義国内の革命戦争派は巨大な二重の責務をおわされているのであり、我々はこれと思うとき、激しい戦慄を憶えないわけにはいかない。中国共産党の「革命外交」に対するヴェトナム労働党―南ヴェトナム解放戦線の批判やミュンヘン・ゲリラ戦を評価しない中国共産党へのパレスチナゲリラの批判はまさに我々にこそ向けられていることをはっきりと肝に命じなければならぬ。従って我々における国際主義はまず何よりも米帝―南ヴェトナムカイライ政権、米帝―シオニズムに対する闘いへの直接的参加として実現されなければならない。一国内の階級斗争の成熟の度合い等の「お家の事情」に規定されない、また間接的な支援斗争でない斗争こそが要請されるのである。しかも現代過渡期世界における国際主義は我々にとつてのみかかる闘いとしてあるわけでは決していない。米帝―南ヴェトナムカイライ、シオニズムへの闘いはまさに世界のプロレタリアートにとつての第一義的な共通の責務であつて、かかる直接的な戦闘への参加は、テルアビブ斗争によって世界のプロレタリアートの国際主義の規準として打ち樹てられたのであつた。直接的な戦闘への参

加的に違ふのだ。ただこれに比肩するのはチェ・ゲバラの闘いであろう。ゲバラの闘いはこちらもある意味で三英雄の闘いを大きく凌駕している。しかしゲバラの闘いが「困境を越える闘い」として斗われ、それはまた「世界へ」と普遍化されるものではないながらも、飽くまで中南米大陸革命をいかに勝利へ導くかという中南米大陸革命の枠内での戦略として提示されたのに対し、テルアビブ斗争はただ世界からのみに規定された闘い、飽くまで世界革命戦争戦略の一環として斗われたのであつた。もちろんそれは極めて抽象的であり、その端緒としか言ひようはないが、要するに国際義勇軍というように何かしら国内の革命戦争―党建設の闘いから外的なものとしてとらえることは決定的に誤りであり、歴史を正しく総括してはいないと言わねばならない。彼らは国際義勇軍では断じてないのだ。では何か？

テルアビブ斗争の偉大な第二の意義は世界階級斗争の中に初めて「世界武装プロレタリアート―世界赤軍」を生きた姿として、極めて端緒とは言え登場せしめたことにある。まさにこの一点においてテルアビブ斗争は世界階級斗争に金字塔を打ち樹てたのである。第一に述べた巨大な課題を我々につきつけ得たのである。

我々は従来、プロレタリアートという概念を（そう、まさに概念を）あれこれこねくりまわし、解釈し、意味付与し、頭を混乱させ、ついにかような観念遊びを放棄して実践の中に突入していくか、飽くまで概念を追い求め、神々しい幻のプロレタリアートに行きつくか、いづれかの道を進んで来た。前者は当然ながらブントに代表され、後者は革マル派に代表される。しかし共にプロレタリ

加はこの意味において決して我々が何かしら、負い目を感じてやるといったようなプチブルインテリ的な闘いではなくて、まさに世界党建設のための不可避の闘いとして斗われるのである。つまり三英雄の弾丸は先進資本主義国内に於て革命戦争を準備し、実践している全ての先進的プロレタリアートに対し、彼らが世界党建設の闘いにかかる国際主義をその契機としておし進めていくか否かを鋭く迫つたのである。この問題を避けて飽くまで一国的枠内で党建設をすすめていく諸君はたとえ彼らが表面的にテルアビブ斗争を支持しようとする結果的にはテルアビブ斗争を否定し、その巨大な意義に目をつぶるものであるし、また一方で世界浪人ならぬ世界浮浪人的に主体の立脚基盤抜きにテルアビブ斗争を美化・讚美する諸君もまた結果としてその否定に繋がっていくと言わねばならない。

六〇年代後半の階級斗争を領導し、今では構革派の諸君さえもが口にする「組織された暴力と国際主義」というスローガンの二元化され、極めて抽象の中にとどまったその内容を世界党建設に一元化される具体的な内容として獲得すること、しかもかかる世界党建設の闘いが不可避に無数の「テルアビブ斗争」を含み、まさに重要なモメントとしてあること、我々先進資本主義国内の革命戦争派はこの課題を必ず成し遂げなければならない。この意味においてテルアビブ斗争を「国際義勇軍」として評価するだけでははなはだ不十分である。奥平、安田、岡本の三英雄、志なけばにして倒れた山田同志、そしてまた丸岡同志は決して三〇年代のスペイン人民戦線への義勇軍やその他諸々の義勇軍ではない。決

アートを生きた姿としてつかみ得なかつたことにはかわりはない。それ故世界プロレタリアートとなる最早純粋概念として我々の階級斗争の彼岸にあつた。

一九七二年五月三〇日テルアビブ・ロッド空港に降り立った三同志はこの彼岸にあつた世界プロレタリアートを荒々しく闘う生きた革命戦士として一挙に此岸のものとした。世界階級斗争は漸く「世界プロレタリアート―世界赤軍」を現実に持ったのである。しかしもちろんそれはほんのささやかな端緒でしかない。何千万何億というプロレタリアが闘いをくりひろげていく時のまさに文字通りの世界プロレタリアートからすればはなはだしく貧弱であり、単純であり、未だ抽象の固い殻に覆われている。にもかかわらず一度現実に生きた姿態を持つてあらわれたこの「世界プロレタリアート」―「世界赤軍」は世界革命戦争としての階級斗争の中でダイナミックな展開の課題を我々につきつける。この課題こそが第一の意義として述べたところの世界党建設の闘いに外ならない。

さてかかる画期的な意義を持ち、それ故に我々に巨大な任務を背負わせたテルアビブ斗争が、その意義の実現を目指して不断の目的意識的活動として準備され、実行されたかと言うと決してそうではない。それはこの実践の結果であり、むしろこの実践そのものが、それを実現した路線に矛盾し、敵対し、我々がそれ故にこの闘いを従来我々の路線総体の総括として総括した結果に外ならない。それ故我々は次に従来路線とテルアビブ斗争との関係についてみなければならぬ。

ここでは二つの項目に分けて論じる。第一は一向過渡期世界論とテルアビブ斗争との関係であり、第二は第三世界主体論とテルアビブ斗争との関係であり、また一向過渡期世界論と第三世界革命主体論との関係である。

④ 一向過渡期世界論の一つの頂点としてのテルアビブ斗争。

我々が「赤軍」No.4として純化された一向過渡期世界論及びそれを軸とした赤軍派の理論（とりわけ第二次転換路線以前）に大きく影響され、それに依拠してきたことは否めない。まさにテルアビブ斗争は一向過渡期論の極限に実践された闘いと言えよう。

一向過渡期世界論の最も優れた点は世界的規模での△Pr||BrV関係を理論の基礎にすえたところにある。従来我々をとらえてきた様々の理論での一国的枠を突破し、全世界を獲得する一本の赤い糸を手に入れたのである。レーニンが「万国のプロレタリアよ団結せよ」と並べて「全世界の被抑圧民族よ団結せよ」と叫んで世界階級斗争を謂わば二元化されたスローガンとして提出したのに対して世界的規模での△Pr||BrV関係という単一の戦場として世界をとらえたのである。こうして世界をただ階級斗争の場として、しかも全世界単一のPr階級斗争の戦場として把握することによって一向過渡期論は理論を世界の解釈・意味付与の場から生き生きとした階級斗争の現実へと解放した。このように実践をこそ前面に押し出しつつ、一方で一向理論は独特の歴史把握を行なう。ロシア革命を境として△Pr||BrV攻防関係においてBrの

攻撃性・能動性、Prの防衛性、受動性という関係が逆転し、Prが攻撃性、能動性を獲得し、Brは防衛的、受動的立場に追い込められたというものである。これは「赤軍」No.4に三つのテーゼとして定式化されていることはあまりにも有名だが、このような歴史把握が主観的恣意的であることは明らかである。が、それはさておき、この二つの基礎視座を基底として攻撃型階級斗争論が展開され、現代過渡期世界における攻撃型階級斗争が世界革命戦争として物質化されることが主張され、プロレタリアートの普遍性・世界性・能動性・攻撃性、ブルジョアジーの民族性・一國性・受動性・防衛性、世界階級斗争の世界的同質性・同時性等が語られる。そして運動の組織の型として世界克一世界赤軍一世界革命戦線が提起されるのである。

この一向理論はとどのつまり第一の実践視座から実践第一主義的傾向が結果し、第二の歴史視座からその歴史法則的性質に規定されて理論の唯物論的体系化、歴史法則の発見・定式化の傾向が結果するのであり、しかも両極への分解が結果する。この二者斗争的二律背反は一向理論の当然の帰結である。なぜなら一向理論が今まで述べてきたように実践主義と主観的歴史把握のアマルガムであり、日本の新左翼、更には先進国新左翼の運動の総括を世界階級斗争の総括として批判し得ない、即ち先進国共産主義運動の敗北と修正主義への転化、新左翼の登場、一方で中国に継承され第三世界の民族解放一社会主義として波及する革命戦争の現実とそれによる先進国内革命派の革命の現実性への接近という世界階級斗争をトータルに批判し得ないからである。そしてこのことは資本主義（帝国主義）の内在的批判の欠如に帰因している

のである。

しかしこれでも先の根底的理由とは言えない。一向過渡期世界論は何故に現実批判を資本主義一現代帝国主義批判として成し得なかったであろう。これが解明されねばならない。それはこうである。一向過渡期世界論は世界的規模での△Pr||BrV関係を基礎視座とすることによって理論をまさに実践の理論たらしめたのであり、理論の、ころがり弁証法^{的展開}（注1）はその極限としての△世界克一世界赤軍一世界革命戦線Vへと到達した。問題は次である。このようにころがり弁証法の展開が世界克一世界赤軍一世界革命戦線を提起されるや否や、理論はそこで停止せざるを得ない。だからここで問われることは理論を転倒すること、ころがり弁証法がその極限に提示した△世界克一世界赤軍一世界革命戦線Vから理論を構築すること、とりわけ△克Vから理論を構築すること以外にはない。世界克建設をいかに勝ちとっていくのかを中心軸として全理論を再構築することである。一向理論はここに至りますむことができずにその一歩手前で立ち止まってしまった。ここには一向理論に内在する理論の体系化の傾向が暗い陰を落としていたのである。

このように一向過渡期世界論は理論のまさに△環Vをつかみ得ぬままにその自然成長性に拜跪し、それ故に実践第一主義の傾向を一方に、唯物論体系化の傾向を一方に生み、二極分解を引き起こし、その極めて優れた点にもかかわらず抽象性の固い殻にくるまったままに固定されたのである。

かかる限界から見ると、テルアビブ斗争を世界克建設の重要なモメントとしての国際主義の典型として、一から目的意識的に

準備し、遂行し得ることのできなかったことは謂わば当然であった。

さて、このような一向理論に我々実践者が依拠するとき、実践第一主義に純化するのには当然の帰結である。即ち一向過渡期世界論のPrの能動性・攻撃性、世界革命戦争、Pr階級斗争の世界的な同質性・同時性といった諸概念を直接的に、生のままに実践にうつすということになるのである。我々の闘いはまさにこのような一向理論の諸概念の直接的実践化に外ならなかった。かかる諸概念が本当にリアルに感覚（そう／感覚だ）されていたのである。しかし実にこのことこそこれらの諸概念が極めて抽象的なものに過ぎないことを物語っているのである。階級斗争における実践からの規定を受けての理論の原則的な階級斗争におけるプロレタリアートの能動性・攻撃性一何と抽象的な、それでいて魅力あふれる、そしてわけのわからないことばであろう／このことばをこそ奥平同志は胸に秘め、パレスチナに向けたのであり、そしてこのことばに魅せられて我々は全世界を股にかけての作戦

国際ゲリラ戦を共に語ってきたのであり、そして奥平、安田、岡本三同志はまさに△世界プロレタリアート一世界赤軍Vとして能動的・攻撃的に、しかも世界にふつと湧き上る革命戦争の質をもってイスラエル・ロッド空港を奇襲したのである。

このようにテルアビブ斗争は一向過渡期世界論の極限に実践され、それ故にその限界をはっきりとした形で示した。一向過渡期世界論がそもそも唯物論的体系化の傾向を持ち、それ故新たな理論の展開はただ抽象的概念を基底とした実践の中に求められざる

を得ないのであり、しかも実践とその基底概念とは直接的な、極めて抽象的な関係にあるのだから実践からの規定を受けての理論の原則的な展開は成され得ない。現実の階級斗争の波に大きく左右され、ブレを引き起こさざるを得ないのである。一向過渡期世界論の生みの親、塩見同志の最近の論文にみられる右へのブレと、りわけ最も優れたものとしての国際主義の放棄、一国主義への後退の中にこのことは如実にあらわれている。(注2)

この限界はテルアビブ斗争が一向過渡期世界論の極限に実践され、実践されるや否やそれが巨大で豊かな内容をつきつけるが故に完全に露呈し、もはや一向過渡期世界論にはテルアビブ斗争は彼岸のものとなったのである。

㊤ 第三世界革命主体論とテルアビブ斗争

我々が国際軍―国内ゲリラ軍(現実には国際軍への支援組織でしかなかったが)として世界革命戦争に参加していった時、日本階級斗争は本格的武装斗争の未だほんの端緒期であり、武装斗争をはじめようとする全ゆる組織、グループがそうであるように斗争主体の純化過程を辿るという事情によって第三世界革命主体論へと傾斜していったのである。しかもそれだけではない。我々の場合一向過渡期世界論に依拠していたということがあり、先に述べた一向理論の難点によってそれは更に拍車をかけられ、そこへと固定化されたのであった。どういふことか。それに答えるためには先ず第三世界革命主体論の歴史的背景とその大概の構成をみてみなければならない。

六九年秋の敗北と本格的武装斗争―軍事問題の提起によって様

の主体は生れず、革命主体は第三世界人民であり、市民社会極少派たらざるを得ない革命戦争派(第三世界革命主体論ではこの市民社会―帝国主義国家内の革命戦争派の発生の根拠が全く説明されず何から天から突然に降って湧いたような突然変異が何かで生じたかのようにしか扱われない)は不断の自己否定を通して斗っていくものとしてあるというものである。ここから「世界の農村で世界の都市を包囲せよ」、「帝国主義国内革命戦争派はヴェトナム解放武装勢力の分遣隊として武装斗争を展開せよ」、「ヴェトナム人民の一発の弾丸、一機の飛行機として帝国主義を攻撃せよ」等々のスローガンが提出される。そしてこの基本戦略から当然ながらPrの否定(太田竜はプロレタリアにかわる概念として「窮民」を提起している)、先進資本主義国における党建設の否定、合法的諸活動の大半を第二義化もしくは否定が導き出され、運動・組織路線として戦闘団主義、少数精鋭主義、戦術主義、軍事力学主義、軍事召還主義が結果としていく。

これが第三世界革命主体論のアウトラインである。先に述べた様に第三世界革命主体論と一口に言っても様々のニュアンスがあり、ここでの概略は若干単純化し過ぎのきらいがあるが、その核心は以上であると言ってよからう。

さて次に一向過渡期世界論に依拠していた我々がこの第三世界革命主体論に傾斜していったことの解明のためにも両理論の内的関係をみなければならぬ。

一向過渡期世界論がその革命的意義にもかかわらずその限界を「ころがり弁証法」の極限に提起された「世界党―世界赤軍」の地

々の組織・グループが第二次共産期の党内斗争を先達としながら様々の角度から、仕方でも本格的武装斗争の課題に取り組んでいった。この時のこれらの組織・グループにとって先ず重要であったことは合法斗争から本格的武装斗争(↓非合法斗争)への飛躍期であったが故に自らをかかざる武装斗争を担う主体へと飛躍・純化することであった。この主体の純化過程は「飛躍期」においては当然経過すべき一過程であり、純化は徹底的であればある程良い問題は次にある。この純化過程は一つの過程であり、従ってそれは止揚されるべき過程であり、そこに固定化されては決してならないという点であるにもかかわらず六九年秋以降の本格的武装斗争の飛躍期―端緒期の様々の諸困難性の故にこの過程を固定化する傾向が生じてきた。広汎なプロレタリア人民に依拠した荒々しい武装斗争への端緒期純化の過程をあたかも本来目指すべきものとして固定化し、そこに安住する傾向、一言で言えば斗争の飛躍に伴う新しい自然発生性・自然成長性への拜跪である。この傾向は様々の色合いを持ちながらも一般的にはプロレタリアートへの不信・軽蔑・合法的諸斗争への不信・否定・軽視・革命理論への軽視・蔑視と実践第一主義、実践における党の否定、テロリズム等の内容、気分を持つ。この傾向は赤軍派をも含め、主には無党派の武斗グループを多かれ、少なかれとらえてきたのであったがこの傾向を理論化し、固定化を完成させるものこそ第三世界革命主体論に外ならない。この理論にも種々の色合い、ニュアンスの差異はあるが、共通するのは「帝国主義―市民社会」第三世界―植民地社会」を世界の基礎矛盾として把握し、市民社会には革命

平で立ち止り、そこから理論の転倒化・再構築にまでつきすすまず、それ故に実践第一主義的傾向を理論の唯物論的体系化傾向への二分解と対立、要するに理論の抽象化を招き、更にはその到達した最高の表現としての「世界党―世界赤軍」を何か抽象的なものとして遂には理論の彼岸にまで押しやってしまう点に持つことは既に述べた通りである。一向過渡期世界論こそが日本階級斗争史上初めて本格的武装斗争を生み出すことができ、また赤軍派の斗いに規定されて多くの無党派武斗派集団が一向過渡期世界論に傾斜していきながらもこの限界の故に無党派武斗派集団の無党派性を解体し、赤軍派に吸収することができずにかえって無党派武斗派集団にその存立の基礎を与えたのであった。そしてこのことは現実の赤軍派の実践の中に明確にあらわれており、「軍」党の戦闘団主義、実践第一主義の一発主義の傾向は根強く、最近では赤軍派自身が無党派武斗派へと解体されつつある。(注3)

今述べた点こそが第三世界革命主体論との内在的関係を生み出しているのである。

ではいよいよ我々にとっての一向過渡期世界論―第三世界革命主体論の関係を述べていかねばならない。

我々が武装斗争へと参加していった時、武装斗争は端緒期であり、しかも我々が無党派グループとしてあったことよって一向過渡期世界論に依拠しつつも自己の無党派性を解体することなくそこに固定化し、無党派戦闘団として闘いをすすめてきた。更に時期が端緒期であったことは次のことを意味した。三〇年代の先進資本主義国における革命斗争の敗北、武装解除と共産主義運動

のBrへの屈服・変質・修正主義への転化、革命の現実性からの乖離、その後の所謂旧左翼への即目的批判として登場した新左翼とその成長、それが本格的な真の共産主義運動へと飛躍していくとき（日本の革命運動も大よそこの軌跡を辿ってきた）先の先進資本主義国内の共産主義運動の修正主義への転化に対して唯一革命の現実性を堅持し、共産主義運動を発展させてきた中国共産党、そしてその流れの第三世界人民の民族解放―社会主義革命の拡がりとなります。豊かになる革命の現実性へと接近し、そこから多くのことを学び、教訓としていくことは当然であり、またそうあらねばならない。そもそも新左翼の運動において本格的武装斗争開始の前夜とも言うべき六〇年代後半の斗争は「ヴェトナム反戦」斗争として明白にあらわれているように第三世界の革命の現実性からの直接的な規定性を受けているのであり、真の共産主義運動―本格的武装斗争を担う党建設の斗いに突入するやこのことはより切実な問題となってくるのである。従来ヴェトナム反戦というような直接的な、抽象的な、それ故外的な規定を受けるにとどまらず軍事技術上の極めて具体的な問題から党建設の原則の問題まで全ての領域にわたって貧欲に学ぶこと、即ち我々の運動への深い内在的な規定を受けるまでになる必要があること、このことは極めて理にかなったことであり、最低限必要なことである。

△端緒期Vに運動が必然的に要請したこのような事態が我々の場合のように無党派武装斗争グループとして一向過渡期世界論に依拠しつつもそこに固定化し、しかも端緒期の運動の陥穽としての新しい自然成長性への拝跪の傾向へと向っていたことに更なる拍

先ず理論的にはどうか。レーニンには次のように言っている。「手工業性という概念には、訓練の不足ということのほか、まだ別のあるものが含まれている。一般に全体としての革命的活動の範囲が狭隘なこと、このような狭隘な活動にもとづいてはすぐれた革命家の組織などが形づくられるはずがないのを理解しないこと、最後に―そしてそれがかんじんの点であるが―この狭隘さを正当化して特別の『理論』にまでたかめようところをみていること、つまりこの領域でもやはり自然発生性のまゝに拝跪していること、これがそうである。」（何をなすべきか）―傍点は来見。

我々の場合、この「特別の理論」こそ第三世界革命主体論であった訳であり、そもそも理論そのものへの軽視・蔑視の傾向が根強くあること、従って軍事斗争の展開に伴う様々の困難な諸課題・任務を系統的・計画的に整理し、また解決していくことができないのである。それは即ち現代過渡期世界における革命戦争派として世界党建設に向けての綱領獲得へと接近することができなかったということに外ならない。そしてこれは次の内容である。

- 依拠すべき階級・階層分析
- 反スターロッキズム止揚と左翼スターリニズム規定の克服
- スターリン主義の克服

以上の諸課題に全く手がつけられなかったこと。

○ △世界―日本―関係の原則的把握ができず、つまりそれを世界党建設の斗いの不可避のものとして把握できずに具体的な

車をかけたのであり、自然成長性への拝跪を理論化して合理化、固定化する第三世界革命主義論へと乗り移っていったのであった（とりわけ国内において）。

かかる一向過渡期世界論から第三世界革命主体論への乗り移りは国際軍の場合、現地パレスチナの生き生きとした、荒々しい、まさに圧倒的な革命の現実性がたぎっているが故に第三世界革命主体論として理論化されてはいないながらも、若干のそこへの傾斜があったことは事実であり、従ってテルアビブ斗争がこの第三世界革命主体論の気分を表現していないとは言えない。とは言えテルアビブ斗争はやはり一向過渡期世界論からの規定を圧倒的に受けているのであり、先に述べたその限界性の故に第三世界革命主体論への傾斜を背後にもつものであると言えよう。

ここで第三世界革命主体論に対する批判的総括をしなければならぬがそれは次節で触れたい。

本節ではテルアビブ斗争の偉大な勝利と全く対照的な我々国内組織の大敗北に焦点をしばって総括していきたい。

我々が一向過渡期世界論に依拠しつつも本格的武装斗争の端緒期に特有の新たな自然成長性の中に落ち込み、第三世界革命主体論へと乗り移り、そのことを固定化し、全く自然成長性に拝跪することになったこと、またその歴史的論理的背景については既に述べた通りであるが、そのことが我々においていかなる内容を持っていたかを詳しくみていこう。

情況に規定されての直観的把握にとどまったこと

以上のような理論的諸課題についての曖昧性を残したままに、従って理論的な立脚点を構築せぬままに（もちろん組織的に）

- 中国共産党―毛沢東
- ヴェトナム労働党―ボグエンザップ、ホー・チ・ミン
- キューバ共産党―ゲバラ、カストロ
- その他ラテンアメリカ、アフリカ etc

の経験、諸著作への接近が行なわれ、それは当然ながら非系統的な、思いつきの個々バラバラの吸収であり、とりわけ運動組織路線上の課題に偏って学習されたこと。（このことに関して言えば、一向過渡期世界論に依拠し、我々と同様に新たな自然成長性に拝跪する傾向のある赤軍派の諸君が組織として立脚すべき地平を獲得することなく、個々バラバラにゲバラ、毛沢東、ホー・チ・ミン等々へと接近していることにも全く同根の問題がある。まさに赤報派の矢草三郎君が的確に指摘しているように連合赤軍の粛清が明らかになるや否や、森君、永田君は「無私、破私立公の精神やマルクス・レーニン主義に立脚した科学的態度」がなかったと言って批判され、マルクス、レーニン、毛沢東、金日成、ゲバラ等々から個々人が学んだ内容をもって批判されているのである。」（矢草三郎、革命戦争勝利の道とは何か、査証五号）というところへ行きつくのである。赤軍派の同志達はこの点に深く心をいたすべきであらう。）

次に運動路線においては、プロレタリアートへの不信、自己の

思い上がりから合法諸斗争からの召還、軍事冒險主義」ともかく一発やる。主義という路線である。本格的武装斗争への飛躍、その端緒期に必然化される主体の純化過程を絶対化し、固定し、その上に立って武装斗争を展開しようとする時の当然の帰結である。この「四疊半の中の陰謀」的軍事冒險主義は我々の場合、ただ四疊半の中にもっているわけにはいかず、その矛盾を拡大していった。つまり「外」との関係を第一義的に考えていたから、この関係によって運動路線における極端な秘密主義、閉鎖主義は貫徹されることなく無原則的な非合法の枠の乗り越えが行なわれることとなった。「外」との関係を原則的に調整、処理することができず、完全な場当たり主義に陥入り、合法部門への無原則な介入が行なわれ、それ故に国内における非合法活動は「四疊半」の中でのやせ細りを強要されつつ、それをもし得なくされながら完全な無方針に終始することになったのである。

次いで組織路線ではどうか。結論から言えば「戦闘団主義、少数精銳主義、陰謀家主義」であり、「外」との関係における水ぶくれ主義、半非合法主義である。「外」からの要請による人員獲得が、第三世界革命主体論の結果する「戦闘団主義、少数精銳主義、合法諸斗争からの召還からは成し得ることができず、それ故に完全な一本づり」方式となり、半非合法主義に陥ち込むのである。もともと「戦闘団主義、少数精銳主義」として結果した組織路線は組織の意志統一の規準、従って団結の質が全く定まっておらず、個々バラバラであり、義理人情型組織となり、まさに反帝武装斗争を展開するという一点を除いては全く何らの共通性も有していない

われたそのやり口はブルジョア法を大きく踏み越えたものであった故に尚更であった。任意出頭の承諾と供述、中心メンバーの自供という形で我が組織の大敗北は先に述べてきた我々の組織のあり方に深く根ざしているのである。

更にここで言及せねばならないのはかかる政治警察の弾圧に対する政治的反撃についてである。我々が合法諸斗争からの召還・戦闘団主義であったためにこの政治的反撃を自ら組織することが全くできなかった。合法的諸手段をフルに駆使してこの政治的反撃を組織し得ず、敵への屈服をより完全なものとしたことへの無念さ、口惜しさは格別である。我々はここに政治的反撃を全くやり得なかったことを痛切に自己批判したい。そしてこのためにもこの敗北が我々の組織的敗北であったことを分析し、明らかにしてきたのである。

政治的反撃ということについては、我々と同様の組織路線を持つと考えられる所謂「黒ヘル」グループがあれ程にすばらしい斗い（彼らの斗いと断定し得る何らの確証を我々は持っているわけではないが）を展開しながら何らの政治的反撃を組織することなく（もちろん指名手配されている同志達の見事な逃亡はそれだけで立派な政治的反撃であるが）追いつめられていっているのを見るとき、この感は一ひこしおである。

さて最後に以上述べてきたような根本的な難を何故に第三世界革命主体論は結果するのかを述べよう。

第三世界革命主体論の最も根源的な難を何故に第三世界そのものの反省の契機が全く欠落しているという点に求められる。即ち理論の発生の根拠及び理論提起主体の発生の根拠が全く説明され

組織なのである。組織においては、とりわけ共産主義者の組織においては団結の質は決定的な意味を持っているのであって、これがその組織の全活動を左右する。我々の場合のように、人員獲得という組織の最大任務の一つが、厳格な規準の完全な欠落の故に全く個々人の主観にまかされざるを得ないというような義理人情型組織の団結は全くもろいものである。「義理」とか「人情」とかいったものは極めて強い団結を生み出す時もあるが結局それはブルジョア的なものであって、政治警察との攻防においては何とも脆弱である。我々の雪崩を打った敵への屈服はその最も良い例なのである。

最後に総体としてみると、こうである。系統的な、周到に準備され、考えぬかれ、築き上げられた組織とその活動ではなくして、事実尻をたたかれ、全くの場当たり主義的に、何とはなしにいつの間にかできていったという風な組織であり、その活動であり、それ故に合法―非合法の正しい関係がなく、全くのデタラメであって、合法と非合法とのズブズブ合法主義と、極端な秘密主義とのアマルガムなのである。要するにすぐ目先のことだけしか見えず、目的意識的な、系統的な、計画的なすぐれた革命家の組織、世界党建設の斗いとして遂行されていなかったということである。

以上、我々の国内組織について検討して来たわけであるが、かかる内容を持つ組織が政治警察の追及に耐え切れないことは自明のことである。とりわけテルアビブ斗争に関する我々国内組織の壊滅を目指した政治警察の弾圧は極めて熾烈であり、家宅捜査の無制限の実施、差し押え、任意出頭呼び出し、別件逮捕等なら

ず、その初めから所与のものとして、何かしら天から降ってきたかのように扱われること、理論の彼岸に追いやられることである。カントにおける物自体と同様に第三世界革命主体論は先進資本主義国内の革命戦争派を理論の彼岸に追放し、それ故に理論そのものの発生の根拠をも同じく理論の彼岸に追いやるのである。そもそも理論は自らの発生の根拠をしっかりとその内に把握してなければならぬ。今、何故に世界階級斗争の中で第三世界革命主体論が先進資本主義国内において発生し、一種の流行となっているのか。第三世界革命主体論はこの点を全く説明できない。梅内君よ、君は一体どうしてあのような理論を展開し得るようになったのか。「目が覚めた」などとネボケたことを言うのはやめて自らの理論にしっかりと責任を持つがよからう。AさんやB君やC君ではなくまさに梅内君自身が何故あのように「目が覚めた」のかじっくりと頭を冷やして考えてみるべきであろう。自らの理論の発生の根拠そのものを総括し得ない理論ほど無責任極まりないものはないのだから。

このように第三世界革命主体論は自らの発生の根拠、理論主体の根拠を理論の彼岸におしやることによって、それに依拠する実践者にとっては自らを理論の圏外におくこととなり、運動・組織路線は路線とは全く言い難いものとなって完全な場当たり主義に陥入り、新たな自然発生性の中にしっかりと根を下してしまうのである。

I—IVにおいて自己批判の作業の第一歩としてのテルアビブ斗争の革命的意義の確認、総括と我々国内組織の大敗北の総括を行なってきた。本節ではこの総括を踏まえた上で新たな再生の道、路線について若干ふれてみたい。

結論から言えばこうだ。世界革命戦争を闘い抜き、日本帝国主義を打倒し、世界プロレタリア独裁を樹立し、社会主義を組織し、共産主義へ向けて次第に自らを解体していく党の建設と、その下にあるプロレタリアートの軍隊と世界赤軍の建設の大道へと着実に一歩を踏み出すということである。世界党建設—世界赤軍建設の大道へ、これが我々のスローガンである。一切の活動をこのスローガンの下、そこへと収約する形で闘い、ついでいくつもありである。我々はテルアビブ斗争としっかり結びつくことによって世界党建設の最大の課題である国際主義をこの手に固く握りしめている。まさにアラブ赤軍派が言うように「アラブ赤軍・PFLPの世界革命戦線構築にむけた共同武装斗争、テルアビブ攻撃の国際ゲリラ戦を、全面的に認めるのか否か、この選択こそ、国際主義者として世界革命の任務につくのか、良かれ悪しかれ、ブルジョアジーの側に立つのかの岐路であり、よけて通ること、中間的評価を許すことのない、日本の革命家にとっての歴史的メルクマールである。」(国際主義の問題について(テーゼ補)・序章九号所載)ということなのであり、日本の革命戦争派にとっても未だはつきりとした態度をとり得ないという状況の中で、我々こそがはっきりとテルアビブ斗争を、世界党建設の最も重要な闘いとして評価している。それ故に我々は宣言しよう。初めから目的

意識的に、周到に考え、準備し抜き、世界党建設の不可避の闘いとして無数のテルアビブ斗争を断固遂行していくことを。

我々の政治警察への完全な敗北は徹底的であり、階級斗争へのあの裏切り行為は決してぬぐいされ得ないものである。それ故にこそ我々は何故あのようなことになってしまったのかを徹底的に考え、分析し、新たな再生の道に自己批判の道を探ってきたのである。今我々は著しい後退を余儀なくされている。しかし漸く我々は新たな道の端緒をつかんだ。我々は今しっかりと一歩を踏み出すのだ。

さて、我々の世界党建設への闘いは如何に勝ちとられるのか。それは今までに十分に示唆してきたところではあるが、ここでまとめてみれば次のようになるであろう。

一向過渡期世界論を(世界党)の地平から転倒し、理論を再構築すること、内容的には世界的規模での(Pr) (Br) 関係視座をしっかりと堅持した上で、一向過渡期世界論の抽象性を豊かな具体性でもってかえるために攻撃型階級斗争論を清算するのではなく止揚すること、国際主義の具体化即ち世界党建設へ向けての具体的な活動としてとらえること(具体的な戦闘への参加、兵士等の交換、各国支部建設等要するに全世界の革命戦争派とのまさに具体的共同行動として遂行すること) (公然たる革命の輸出入。

またこのためには一部で手がつけられ始めている日本における具体的な階級・階層分析と調査は不可避(民族問題、政治的民主主義問題との関係で)であるし、何よりも早急に成し遂げられねばならないのは現代帝国主義論(レーニンが第二インターへの根

底的批判として書いた「帝国主義論」に対し、この現代帝国主義論はスターリニズムへの根底的批判である。またレーニンが「帝国主義論」の序言に自ら書いているように「この小冊子はツァーリズムの検閲を顧慮しながら書かれている。だから私は、自分の仕事をきわめて厳重に、もっぱら理論的なへとくに経済的な分析にかぎらなければならなかったばかりでなく、政治についてやむを得ずわずかばかり論及する場合も、非常に用心深く、暗示でもって、すなわちインソップのことばでもって(中略)言ひあらわさねばならなかった」というのに対しては、我々は主体の実践によりひきつけて理論展開をしなければならぬであろう。その他の理論的課題を羅列的に述べると

- 反スタトロッキズムの止揚
- スターリニズムの克服(全体系にわたって)もちろん現代帝国主義論を基底として
- 藤本進治—G・ルカーチの運動組織論批判
- 藤本哲学の根底的批判
- 第三世界革命主体論等の非マルクス主義革命論批判
- 平田市民社会論—共同体論の批判

この課題遂行のために我々は様々の革命戦争派の経験を貧欲に学ぶつもりであり、とりわけ共産同分派斗争から多くを学ぶつもりである。

ところで先の課題と共に第三世界の経験・理論からも貧欲に吸収しなければならないが(このことは何よりも先に述べた国際主

義の実践として遂行され、学ばれる)、従来の非系統的なバラバラの学習でなく、系統だてて吸収するためにも、今述べた理論的課題の解明と不可分である。

最後に組織路線について一言。

我々の闘いとる組織は完全な非合法組織であり、堅忍不拔の革命家の組織であり、それを支える非公然組織である。テルアビブ斗争の大勝利と我々国内組織の大敗北、そしてミュンヘンオリンピック村ゲリラ戦に於てはつきりとあらわれたように、我々は国内の政治警察ばかりでなく、国際的な公安機構—CIAやイスラエル秘密警察—と闘わねばならないのであり、厳格すぎる程の厳格な組織をつくらねばならない。それ故に従来我々を深く把えてきたプチブル的な運動、組織への我執は先ずきっぱりと捨て去らねばならない。例えば同じ色のヘルメットをかぶってその数を競い合ってしまうようなことはもういい加減にやめねばならない。そのために我々は日本共産党から多くを学ぶつもりである(とは言え、現在の日共から学ぶものは何もないことは言うまでもない)。

VI

我々は漸く自らの地歩を固めた。我々はこの一向過渡期世界論にそして共産主義者同盟赤軍派に別れを告げよう。今まで述べて来たように我々は圧倒的に一向過渡期世界論の影響下にあり、赤軍派がその力量不足のせいもあって国際主義から後退していく中で、謂わば我々が共産同赤軍派の国際部を代行してきたわけで

あったが、ここできっぱりと共産主義者同盟赤軍派に別れを告げよう。我々は我々の道を歩む。不抜の世界共産党建設の大道を。我々の出発は輝かしい、祝福されたものでは決してない。あの偉大なテルアビブ斗争の大勝利にもかかわらず……。我々は政治警察への全面的な屈服という汚れた淵から出発する。しかし我々は自信をもっている。さあ、根底的な自己批判への道へ！我々はPFLP、トルコ人民解放軍、西ドイツ赤軍派そして全世界の世界赤軍派と共に歩む。

○ディル・ヤシン作戦大勝利万歳！

○奥平、安田、岡本同志に続こう！

○世界革命戦争勝利！

○世界党！世界赤軍建設の大道へ！

(注1) 〃 ころがり弁証法⁴⁾的論理展開とは実践との不断の相互規定によって理論が螺旋状に展開していくことである。G・ルカーチの組織論はこの一つの典型である。階級斗争の過程の意識⁵⁾党という把握である。またもう一つの典型が藤本進治氏の運動・組織論である。プロレタリアートの内的矛盾の展開として全てが語られるという階級形式⁶⁾党形成論なのである。

(注2) 塩見同志は彼の執筆になる「革命戦争派の綱領問題」(序章七号所載)、「所信表明」(査証No2)、「今回の問題について」(査証No3)：以上執筆順：の三論文において一向過渡期世

生産手段の奪取等が語られていること)。にもかかわらず、日本⁷⁾世界社会主義革命戦争の三つの発展段階、即ち防禦⁸⁾対峙⁹⁾反攻の突っ込んだ内容叙述に於ては、世界党¹⁰⁾世界赤軍建設の極めて重要な活動としての国際活動はスミに追いやられ、わずかに抽象的なことばで語られるにすぎなくなる。そもそもこの論文は、日共革命左派との理論斗争が目指されているのであるから、日共革命左派に完全に欠落している「国際主義」(そしてそれは共産同赤軍派の輝かしい旗じるしであった)をこそ前面に押し出すべきであるにもかかわらずである。塩見同志は「国際主義」を高々と掲げ、日共革命左派との激しい党派斗争を遂行するかわりに国際主義を投げ棄て、毛沢東思想に解体されていくことにより日共革命左派へと屈服していったのである。この傾向は連合赤軍の斗いの後に書かれた「今回の問題について」に於て更にはつきりとあらわれ、社会主義革命路線を放棄し、完全に国際主義を棄て去り、革命戦争さへをも清算する方向へと向っているのである。連合赤軍の斗いはまさにテルアビブ斗争と同質のもので、プロレタリア国際主義をあの悲惨さをもって実現したのであり、浅間山荘の五名の戦士の撃った弾丸は、テルアビブで三戦士の放った弾丸とまさに同じ質のものであったのにもかかわらず、全くこのことを評価することができず、銃撃戦の革命的意義を清算する方向で連合赤軍の斗いを総括しようとしている。これは先ず、銃撃戦から肅清問題を切り離して問題にしようとする態度、更にその肅清問題を「路線方針問題や、その他の諸問題も現在の攻防の要因になっていますが、主要な矛盾は『罰状の在り方とそのブルジョアの徹罰主義』に根本があり、諸問題は、この主要な矛盾に媒介さ

界論の輝かしい国際主義を投げ棄てていく過程を見事に表明している。「革命戦争派の綱領問題」では国際主義はしっかりと堅持され、更には日本¹¹⁾世界¹²⁾関係の原則的な把握が追求されている。日く、「国際的拡散¹³⁾依存主義に反発する余り『国際根拠地¹⁴⁾国際的地下活動』¹⁵⁾革命の永続性(世界的軍事の主動性)の思想性と路線、計画的推進を監視し¹⁶⁾自国に踏みとどまり、地下体制を強化し、国内統一戦線の強化を地盤に、軍事技術と非法法活動を結合し権力の侵攻、制庄体制を突破する姿勢の強調はいくら強調しても強調したりないことだが¹⁷⁾単純自立主義、事実上の反スタ主義(敵対的党派斗争)に陥ち込む傾向を克服する為です。

国際活動(世界委¹⁸⁾各国支部建設、大後方(根拠地化)¹⁹⁾国際地下体制獲得策)が同盟活動の戦略的部分であることをあらためて確認しなす為です。従来の先駆的、本質論議的傾向をもった、あるいは世界戦略からのストレートな演繹法による世界党²⁰⁾世界赤軍の主張を自国の革命戦争の推進との関連で内的に明確にし、更に国際委と日本委との関連をはっきりさせることを通して、種々な諸傾向を政治的組織的総体の関連の中で克服せんとしたのですが思うようにはいかなかった。塩見同志はまさにこの方向で更に問題を追求していくべきであった。そして何よりも何故に「²¹⁾思うようにはいかなかった」のかを考えてみるべきであった。

「所信表明」(破防法公判での陳述)ではこれがはつきりと後退し、次のようになってしまふ。権力規定の問題、民族問題、農民、小Brの問題等が検討されているが原則は堅持され、社会主義革命路線ははつきりと前面に打ち出されている(中小資本の打倒、

れて、副次的な問題²²⁾普遍の問題でありながらも²³⁾として存在し、徐々に主要で普遍的な問題として登場しつつあるということだ²⁴⁾』というような極めて観念論的視座から切開しようとする態度の結果にほかならない。かかる視座、態度からはあの連合赤軍の斗いの強烈な衝激のあとでは次のように社会主義革命路線を放棄するの無理からぬことである。いささか長くなるが引用しよう。

「この武装斗争(『世界』と『日本』)とを一体化し結合させ、「社会主義」と「最少限斗争」を一体化し結合させる過渡的綱領を軸とする反帝反米の人民民主主義革命(反戦、反ファッショ²⁵⁾反生活破壊をプロレタリアートのヘゲモニーで徹底して行い、全面的社会主義革命に発展させる)で始まるプロ、人民、大衆に立脚し抜く社会主義革命戦争路線)を正しく導く革命政治路線のポイン

トは――
④世界²⁶⁾極東²⁷⁾日本の政治的危機と不均等発展の経済的矛盾の日本への集中への合成として日帝は極東の危機と一体に、アジア侵略、ファッシズム、生活破壊の大攻撃を展開せざるを得ず、又、この攻撃は、国際的人民の逆包囲状況故に、その権力再編、階級階層再編は限界性をもっていること。

⑤労働者階級は、この攻撃と一定の限界性に対して、徹底して敵支配階級を孤立させ、他階級、他階層を統合すべく、今すぐ直接の社会主義の実現をめざすのではなく、全人民を統合する「反戦、反ファッショ、生活危機突破、人民民主主義革命」を提起しなければならぬ。

⑥その核心点は、政治的、軍事的斗いの対象を「プロ人民の反戦、

反ファシズム、反生活破壊の要求に直結する米帝、自衛隊、警察と金融資本や、大独占、悪質官僚に絞る。

③中小資本、官僚に対してはプロレタリア的統制管理は貫徹するが、資本主義的生産を当面許容する。以下略

武装斗争にもいろいろあるというものだ。これは急進市民主義的武装斗争の典型ではないか。塩見同志はまさに急進市民主義的武斗派に純化したのであり、テルアビブ斗争をも深く規定した輝しい国際主義は完全に放棄されたのである。

(注3)塩見同志は「今回の問題について」(査証三号)で述べている。「この敗北の総括として(六九年秋大菩薩の敗北……)我々は第三世界の人民との連帯、民族解放、社会主義の支持、(アジア共産主義、キューバ共産主義の発見であり、とくに自己をベトナム人民、ベトナム労働党の日本分遣隊として扱えたこと)を思想的、政治的基軸に……」(傍点は来見)、また上野同志は述べている。「日本で一九六九年赤軍派が誕生したのも、日米帝国主義の第二次大戦后世界再編に対して抗日革命戦争グループ(朝一中一ベ)の革命的質が、日本に上陸するものとしてであった。」
「テルアビブ斗争を支援し、第二次大戦后世界克服の共産主義的政治に向け奮闘努力し、世界共産党Ⅱ世界赤軍を組織せよ、組織せよ、組織せよ」(査証五号)
ここには単なるコトバのアヤ以上にはつきりと第三世界革命主体論への傾斜があらわれている。

(くるみ・ひろし V Z 158)

意見陳述

●テルアビブ三戦士とともに

私は一応、旅券法違反などという名目で、この場に引き出されています。しかし、この裁判の本質と意図は、そのような名目によっては把握されない。全ての現象は、革命一反革命戦争によって規定されており、この裁判もそうした規定をまぬがれていないわけです。つまり、革命戦争の実質的本国内波及に恐怖する帝国主義者によって、個別的に本国内革命戦争派に対する弾圧が繰り広げられており、この裁判は、そうした日本帝国主義者による弾圧の中に位置している。そして、アラブ・パレスティナ人民と共に闘う戦線に対する弾圧の中に明確に位置している。それ故に、今回の権力による勝手気ままな捜査は、アラブ・パレスティナ人民と共に闘う人々、及びその人々と「交友関係」を持つ人々に向けられたわけです。この裁判は、そうした一連の「旅券法違反」を名目とし、実質的にはデイル・ヤシン作戦を支持し、支援した国内組織弾圧の仕上げとしてある。私は、この政治裁判の本質と意図をこのようなものとして確認し、話しを始めます。

★テルアビブ斗争支援委員会通信・特別号

◇アラブ赤軍からのアピール

◇戦争を知らない革命家たちへのメッセージ
地の果てから愛をこめて

他

8・16 日本二戦士追悼国際集会・資料集

★編集・テルアビブ斗争支援委員会

★協力・査証出版

序章社・日本アラブ文化協会

新左翼社

檜森孝雄

まず、イスラエル、ロッド空港襲撃作戦の勝利を、最大限の喜びをもって、アラブ・パレスティナ人民と共に祝します。そして三戦士の英雄的献身性を讃えらるるとともに、殉死した奥平、安田両同志の冥福を祈り、現在、尚イスラエル・シオニストに捕われている岡本同志の奪還を、アラブ・パレスティナ人民と共に誓います。

ロッド空港襲撃作戦は、四つの敵(米帝・世界シオニスト・イスラエル・シオニスト・アラブ反動)に対し、徹底したアラブ革命戦争を戦かっているPFLP(パレスティナ解放人民戦線)と共に戦われることによって、全世界の抑圧された人民が、武装闘争を通じて相互に同盟を強化し、地球上の全地域を戦場として、帝国主義者・シオニストに対する革命戦争を勝利に向けて敢然と戦いかい続けていることを明らかにしました。この公然たる大胆な人民の復讐の雄叫びに恐怖した帝国主義者、シオニスト達は反革命戦争のエスカレートをおし進める一方、強力なプロパガンダ装置

を駆使した悪らつなデマ、ゴキ一を展開しています。無差別テロ、無関係なヤトワレニッポンジン、e t c.

この東洋の吸血鬼、日本帝国主義者も仲間達同様、恥知らずな「人道主義」を振りまき、「日本人キャンペーン」を張ることによって、更に醜い自己を暴露しました。帝国主義者たちは、全く正しく事態を本能的に把握したのです。彼らは一様に「文明国と野蠻」を乱発し、第三世界人民と「荣誉ある本国民」をやたらと區別し、自らの罪故の「野蠻な復讐」に対する恐怖を露わにしています。私達は、帝国主義者達の発言、挙動の全てに、彼らの恥知らずな醜さを見出し「野蠻な復讐」の正義を再確認するだけです。アジア人民に対し、侵略、抑圧、強奪、虐殺の限りを尽くしてきたこの東洋の吸血鬼の前に、全ての野蠻は正義である。日本帝国主義者が「日本人」を乱発し、国民一体化を画策する度に、私たちは侵略民族「日本人」をはっきりと射程にとらえ返し、自らの立場を抑圧されてきた人民の側の銃座におくのです。必死に「日本人」を振りまく帝国主義者達は、それなりに事態的を得ています。ロッド空港で撃たれ、ピンを抜かれた、弾丸と手榴弾は、はっきりと侵略民族「日本人・その天皇」にむけられていたと、私は確信するからです。

私達はこのように、革命—反革命戦争の激化によって、帝国主義者の本質を暴露し、自らの射程を巨大にしていくのです。この東洋の吸血鬼は、Br法をバックとした暴力装置によって更なる反革命弾圧を展開し続ける。しかし、激化する革命—反革命戦争は、帝国主義国家日本の現実を更に明らかにしています。正し

く、今やインドシナ人民、パレスティナ人民に領導された世界革命戦争の波はこの帝国主義国家日本にもおしよせており、最も抑圧されてきた人民は、国境を超えた革命の情念と、帝国主義者共への憎悪をにえたぎらせ、全人民的連帯の下に復讐の戦いを準備し始めています。この革命戦争の炎は、テルアビブ三戦士と、連合赤軍兵士の銃火によって更に火勢を得ています。私達の前に大胆に示された、この更なる武装斗争への道を突き進むことが、虐殺され、抑圧されてきた人民、兵士を追悼する唯一の道であり、この攻勢の炎は帝国主義国家日本を残らずなめ尽すまで決して止むことはないだろう。そして、この炎が世界の人民の炎と連鎖し世界社会主義共和国建設に向けた人民の復讐の戦いが全ての吸血鬼共を、この地上から抹殺し尽すまで決して止むことはないだろう。

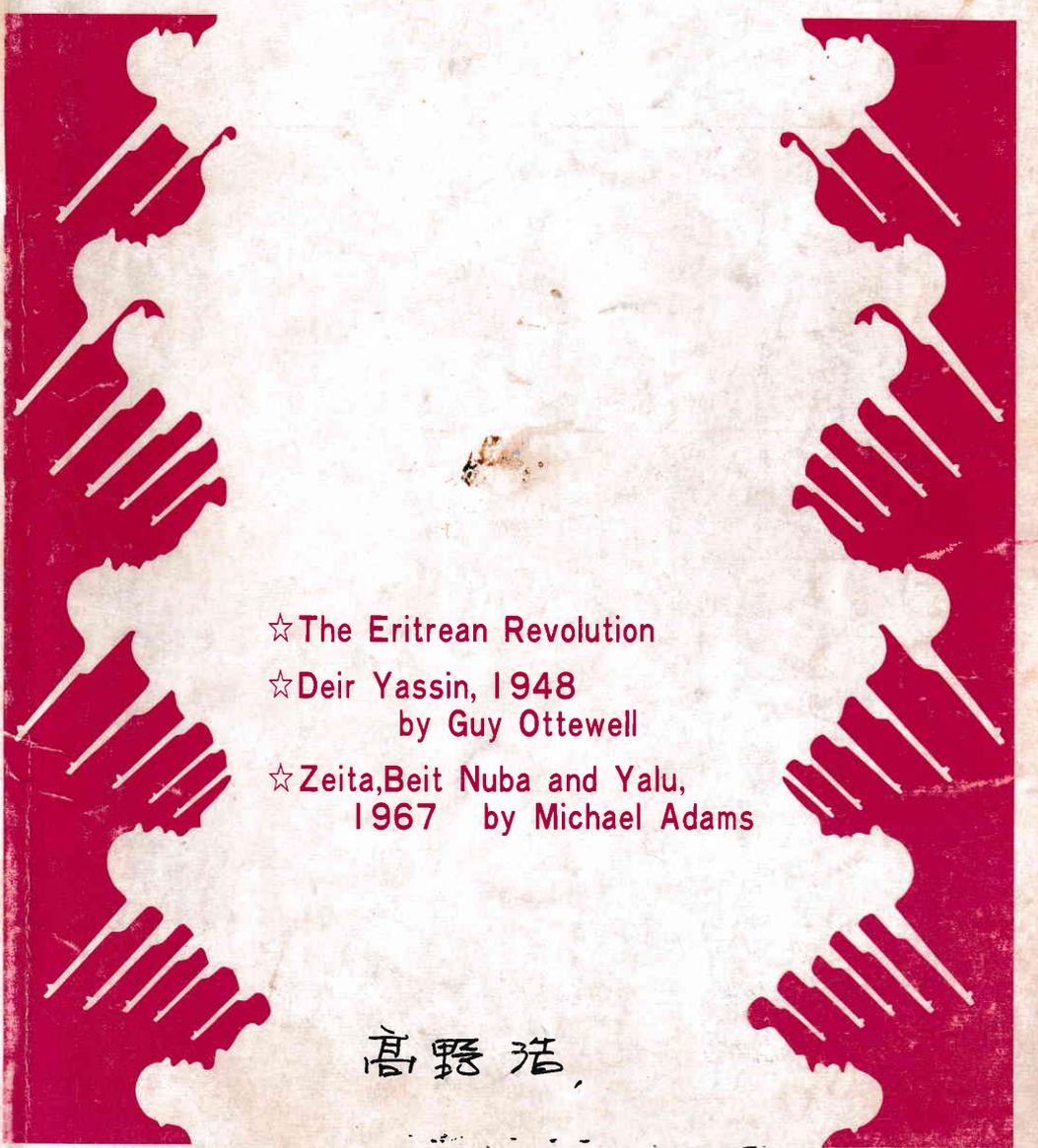
最後に旅券法について言及します。この法律は、人民の自由往來を侵害し、帝国主義者たちによって勝手気ままに分割された国境を既成事実として、人民を帝国主義者共の所有物となし、帝国主義者共の権益を擁護することを目的としています。私はこのようなBr国家権力の暴力に柔順であるわけにはいかない。そして、このような権利侵害・弾圧を取り分け集中的に在日朝鮮人民・中国人民にむけた出入国管理法に、憤りをもって抗議します。

世界革命戦争勝利！

一九七二年九月二十八日弁論
(ひもり・たかお 世界赤軍兵士)

VISA

1972,12<NO,6>

- 
- ☆The Eritrean Revolution
 - ☆Deir Yassin, 1948
by Guy Ottewell
 - ☆Zeita, Beit Nuba and Yalu,
1967 by Michael Adams

高野浩